



新・隔月連載 CLOSE UP やさしい日本語を使って社会教育をバージョンアップ

(第3回) 「難民」と共に生きる

「にほんごCompass」Japanese Language School 代表

小野 久美子 (大分県別府市)

ここ大分県別府市には多くの外国人住民がおり特徴的なのは立命館アジア太平洋大学（APU）に在籍する留学生が多いということ。コロナの影響で来日できない留学生がいるにもかかわらず2021年11月30日現在2936名の外国人が在住し出身国・地域は92になる。私は2013年より別府市でBEPJU Japanese Language School（現にほんごCompass）を運営し留学生をはじめ企業に勤めるビジネスパーソンや日本人の配偶者の方に日本語授業を行なっている。2015年からはAPUやあしなが育英会アフリカ事業部と契約を結びAPUにて教職員クラスを担当することや国内外のアフリカの留学生をオンライン教師へつなぎ、サポートすることなどもしている。

その別府市に難民であった留学生がいたことをご存知だろうか。2016年より日本政府の国際機関の一つである国際協力機構（JICA）は国連の難民支援機関である国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の協力を得て「シリ



＜プロフィール＞

小野 久美子（おのくみこ）

外国語短期大学外国語学部西語学科卒業
大分県別府市「にほんごCompass」

Japanese Language School 代表

「入門・やさしい日本語」認定講師

緒方貞子氏の『難民支援の現場から』（集英社文庫）、梓沢和幸氏共著『外国人問題ノート』（アルク）に感銘を受け2001年より日本語教師の道へ

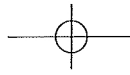
2013年BEPJU Japanese Language School（現にほんごCompass）を設立、国内外に在住する外国人への日本語教育を行う

2019年より難民を知る活動、2021年より外国人と関わる日本人に向けた「やさしい日本語」の普及活動を行う

ア平和への架け橋・人材育成プログラム」を通じシリア難民の若者を1年間で20名、最大で100人を留学生として国内の大学に受け入れ始めた。難民として隣国のレバノンやヨルダンで暮らすシリア人から留学生を募り2017年9月APUに一期生として2名の留学生とその家族2名、2018年には二期生として留学生2名と家族1名が来日した。

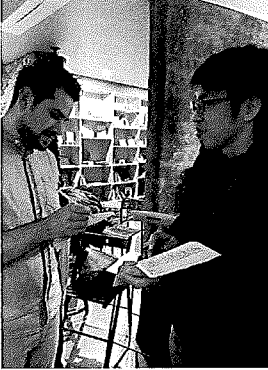
初めて会った彼らは丁寧すぎるほどのお辞儀をしながら「こんにちは」と靴をそろえた。一期生は2年間大学院でMBAを学びつつ日本語学習を週3時間行うものだった。JICAからは国内就職を見据えてとのこと。APUにて週20時間学ぶ大学生であっても易し

くはない。それでも彼らは授業が始まる5分前には現れ、バスを待つわずかな時間にも教科書を開く。熱心な姿に驚かされた。次第に心を開き始めたのが、家族がヨーロッパやアフリカなどに離れて暮らしていること、シリアは夜であっても女性が1人で歩けるほど平和な国だったこと、世界三大料理と言われるほど食に富み、訪れる人々に対して、もてなす国だったことを教えてくれた。私たちが同じように友人や家族がいてあたりまえの日常を送り大学教授、理学療法士だった彼ら。住み慣れた場所を奪われ、遠い別離を体験する困難な状況にありながらも、前を向く姿、いずれは国に帰り国を復興させたいと願う彼らから刺激を



クローズアップ

☆キャプション入る



受ける日々だった。ある時、友人らに「日本に難民?」「またヤバいことに関わってるね」と言われ平静な気持ちでいらなかった。「難民」それは遠い国の出来事で怖いイメージされることを知った。

2000年、日本語教師を目指し都内の学校に通う私に担当の教員が勧めた本、それが緒方貞子氏の『難民支援の現場から』（集英社文庫）と梓沢和幸氏共著『外国人問題ノート』（アルク）だった。そこには日本という国は外国人に優しい国ではなく閉鎖的で排他的であることが描かれていた。当時の政府は1983年に「留学生10万人計画」を打ち出し国際化とうたわれている時だった。（2003年達成）正反対の世界に衝撃を受けた私は社会的弱者になりがちだと知った技能実習生へ教えることに

した。6年ほど関わり受け入れる企業においては外国人労働者を「モノ」のように扱い、出身国によって日本人の見方が変わるといって悲しい現実を知った。

あの時、無力を感じ、何かしらの行動に移せなかったことが心残りだった。確かに日本においての難民認定率は少なく関心がある人の方が少ないのかもしれない。しかし、今こんなにすてきな人々が別府市にいる。彼らを知ってもらうことが何かできないだろうか。その想いで地元にあるカフェ「アソビ」のオーナーにかけあい賛同を得た。

2019年12月、年末であるにもかかわらず50名近くの地域住民の方々が集まった。ところが9月に来日した二期生は、日本語学習歴が2ヶ月だった。そこで地域の方々に取り入れたのが「やさしい日本語」であった。文の構造を簡単に、単文にする。敬語は除き文末を「です・ます」に変える。たったそれだけでアクティビティではお互いの距離が一気に縮まり笑

顔があふれた。その後のプレゼンテーションでは地域住民の方々による質疑に彼らの生の声を届けることができた。発信すれば届くこと、情報が届けば難民に何かしたい、支えたいと考える人が少なくないと実感した。2020年2月には公民館にて参加者と共にシリア料理を作り日本語で説明。12月には大分市にある高校の文化祭にて大阪に就職したシリア人とNPOをつなぎ、高校生や保護者、教員からの質疑に応じた。2021年

2月には高校生に向けインドネシア人の彼女が現地シリアで行った難民との交流、さらに夕ボス会議での難民疑似体験を紹介した。やさしい日本語を用いると心のバリアが外されるかのようだ。もっと難民のことを知ってもらうには、どうすれば良いだろう。ふと、外国人と関わる「日本人」にスポットを当てれば、違う角度から考えることができるのではないかと考えた。書店で吉開章氏の『入門・やさしい日本語』を手にし、やさしい日本語は国際交流だけでなく観光誘致、雇用創出、地域メ

ディアへの貢献、さらにお年寄りや障がいを持つ方々へのサポートにもなりうることを知り目から鱗が落ちる思いがした。即、「入門・やさしい日本語」を受講した。



☆キャプション入る

やさしい日本語は社会の中で困難な状態にある人々に目を向け支え合う社会をつくる契機になるのではないだろうか。多文化共生において地域の関わりは大変重要だ。外国人へ「教える」こと以外で共生に携わる「やさしい日本語」の使い手が増えることを心から期待し、これからは私は、ことばで人と社会をつなぐ活動を続ける。